

朔平の印象

——附 左雲縣志稿に就いて——

小 野 勝 年

石佛寺の欄干に寄り、或は雲崗別墅の亭に腰を掛け乍ら、見るともなく眺めて居ると、往き歸りのトラツクがよく目に停つた。或る時は一、二台、多い時には數十台あるかと思はれた。それには兵隊の乗つたものもあり、荷物の満載されたものもあり、或は全く空車の場合もあつた。

大同へ向ふ車は第一窟の東方で一應姿を没し、左雲へ向ふものは魯班窰から丘陵にさしかゝり段々姿が見えなくなつて行つた。

尤も自分等が雲崗に來た當座は、未だ道路が充分でなく、武州河の河原が利用されて居たので東からのものは可成り遠方から沙塵を立てゝ來る有様が見え、逆に西方のものは僅かに姿を現はすとすぐで、却つて音のきこえてゐる間の方が長かつた。

雲崗で二ヶ月間、佛様を對手に夢の多い生活が續けられたが、其間に一度左雲へ行つて見たいと云ふのも亦一つの夢に屬して居た。

西から來るトラツク、西へ去るトラツク、自分はそれを眺め乍ら屢々水野さんに「是非一度左雲迄行つて見たいですね」と語つたものである。然し其長い生活にも拘らず、雲崗滞在中は遂に行く機會に恵まれなかつた。

殆ど偶然とも云ふべき幸運で左雲へ行くことを得たに就いては矢張り畏友森一郎氏に感謝しなければならぬ。大同へ我々一行が歸へると直ぐ森君は左雲縣に於ける殉職者の慰靈祭に參列する爲、彼地に赴くことになつて居ることを知らせて呉れたのである。

六月二十日も亦相變らずの晴天であつた。八時過ぎ

晉北自治政府のトラックに便乗して大同の西門を出る。少し暑い、空氣が乾燥して居るので氣持がよい。

過る日殆んど小半日、雲崗方面へ行く自動車を徒らに待ちあぐんだ思ひ出の牌樓の邊から西北の視野は急に開ける。右手の山麓には、北魏時代のものとすべき瓦片や土器片を先日採集した所がある。あの邊が魏都平城の西苑のあつた所であらうと云はれて居ると語る。對手はうんと氣の無い返事だ。睡魔に襲はれ初めたのかも知れぬ。睡氣をもよほす氣持の佳さである。

山麓の部落を通り抜けると急に兩側の山が迫つて来る。丘の上には三つ二つ崩れかゝつた烽臺が残つて居る。山々は赤褐色の岩肌を出し、樹木は全く無く、僅かに緑を示すのは岩の龜裂に喰ひ込んで生きて居る雜草だけだ。然もそれが多分に黄色い。緑らしい緑と云へば矢張り河邊の處々に立つて居る楊柳のみ。此河が武州河、水は少なく而も相變らず黄色い泥を流して居る。

行手の丘の上に寺院の様な建物が在る。それが觀音閣で、閣前にはすばらしい五龍壁がある。これは明代

の製作になり、大同城内の九龍壁と揆を一にする。北京の北海公園や故宮にある九龍壁に比較すると頗る重厚な感じを與へるものだ。

路の右側の岩壁に佛と唯だ一字大きく刻した所がある。これも注意しないと知らぬ間に通つてしまふが、佛字灣なる此の地の名稱はそれから生じたのだ。此處からしばらくして愈々雲崗鎮が眼界に入る。先づ見えるのが楊柳の並木、そして白亜の兵舎、岩壁の洞窟、琉璃瓦の高樓、臺上の城壁、さては部落である。

雲崗鎮を過ぎると河を渡つて南側の臺地に登る。魯班窖と呼ぶのは此邊である。此處へは雲崗滯在中一度來た事があり、小規模ではあつたが矢張り北魏時代の石窟ニケ處を發見して喜んだ處だ。道路は段々高くなつて行く。今は河とは全く離れて何れを見渡しても荒寥たる丘陵地帯だ。耕作地は所々にしかなく、多くは赤褐色の地肌があらはれ、雜草はまばらで而も二三寸ぐらゐしかのびて居ない。然し其間には名も知らぬ淡紫色の花が時々むらがつて咲いて居た。三度ばかり羊の群に出會ふ。其都度彼等は爆音に驚いて急に走り出したりした。此様な高原地帯の單調な風景も初こそ物

珍らしかつたが、すぐにあきが來ると睡氣を催さざるを得ない。

相當走つてからである、ふと車窓から覗くと道側の小高い處に一人の兵士が立つて居た。日本の軍人である。どうした譯だらうといぶかると右側に高山鎮に通ずと書いた立札があつた。

河が見える。再び武周河に近づいたのだ。河に面した北下りの斜面に黒すんだ城壁が在る。それが高山鎮である。河を隔てゝ相對する岩山の頂に八角の三層の塼塔が立つて居り、其中腹には一二棟許りの建物がある。後に左雲縣志稿を繕いて知れたが、これが焦山寺と呼ぶ寺だ。見て來た譯ではないがと前置きして、河向ひに寺があり、どうも其處にも石佛がありさうだと屢々聞かされた寺がそれなので、登つて見たいのではあつたが、距離も遠く、急ぎの行でもあるので仕方がなかつた。

車は高山鎮へ折れずに下り坂の道を走つて行く。降るに従つて土地も稍々肥沃となり、綠も多くなつた。暫くすると一土城趾に達した。道路は此土城趾を東から西へと突切つて居る。城の四壁は大體残つて居り、

殊に北壁は規模が大きい。其南側の一部分には部落があり、且つ此土壁を利用して穴居して居るのが三四に止まらず見受けられた。曾ては相當大きな鎮市であつたらしく、城壁の一邊が二十町前後はあらうかと思はれた。道路の新しい修理によつて、處々に黝黒色の土器片などがころがつて居たり、包含層らしいものも見えたりした。後になつて明かとなつたが、此處を舊高山と呼び、其名に依つて高山鎮の前身であつたことが知られた。

此邊では騎馬に乗つた兵隊や歩兵の行軍などに屢々遇つた。丁度此頃は匪賊の夏期討伐とも云ふ可き最中であつたのである。黃塵まみれの道路を我が兵隊は鐵砲や背囊を負うて歩まねばならなかつた。日に焼けた顔にとめどなく流れる汗を拭き拭き、疲れた足をひきづつて行く其御苦勞に對してだけでも自分の頭は自ら下がらざるを得ない。

左雲は小さな盆地をなし、盆地の西北部と東部とに比較的高い山脈が屏立して居る。河は南流するものを肖畫河と云ひ、北流のものを寥家河と云ふ。此二河が縣城の東北方で合流して武州河となり、東に向つて流

れるのである。

縣城は盆地の稍々南西寄りに在り、南は丘陵をなして居る。附近には相當耕地もあり、相變らずの楊柳ではあるが、立木も多かつた。

車は北門から入る。城壁は外側だけ塼で圍み、三丈餘りはあらうかと思はれた。城内に入ると東南側が高くなつて居る。従つて南北を貫く大街も坂をなして居るのだ。大街を跨いで二層の閣樓が建つて居る。近年の修理と見え、朱色も濃い。太平樓と叫ぶさうだ。それを通り、中央十字路に至ると牌樓があり、更に鼓樓があり、其南に圓樓と名付ける建物がある。圓樓は魁星樓と云ふのが本名で、三層の樓であり、大屋根は圓錐形をなし、一二層は八角形である。勿論規模は小さいが、北京天壇の祈年殿と應縣佛宮寺の釋迦塔との結合を思はせるもので、幾度か興味深く眺めるのであつた。

午後二時から殉職者の慰靈祭が始まると云ふので列席した。其時靈前に向つて弔辭を讀んだ縣長が、辭未だ半ならずして獻欵し、更に慟哭し、遂に他をして代讀せしめざるを得ざるに至つたことが今も猶目のあた

りに漂ふ。それが此國に於て長い傳統を有する一つのジェスチュアであつたとかなかつたとか云ふことの詮索は今此處で爲すべきではあるまい。唯だ溫厚篤實さうな氏の面影のことと、夕方縣公署の中庭で寫眞を撮つてあげたが、後に現象してみるとまんまと失敗して居たことを記して置かねばならぬ。慰靈祭が了つて縣公署に歸へると、思ひも掛けない美味な夕食を馳走された。殊に生の赤大根が甘かつた。

パイカルで少しく酔つて居たが、未だ陽があるので城内をぶら／＼歩く。東南隅の城壁に近く一郭の寺院らしき建物があり、棟數も多いので、近づいて案内を請ふ。寺名を楞嚴寺と云ひ、内に入ると意外にも荒されて居なかつた。別にこれと云つたものはものはないが、寺後の藏經閣の建築は重層で、正面五間に各々扉を開いた頗る堂々たるものであつた。階上には藏經の文字の示す様に、嘗ては經典を藏したらしいが、今は經藏が形ばかりあるのみ、南面中央の佛壇には明頃の作かと思はれる木彫彩色の小じんまりした千手觀音二體が安置されて居た。伸々均勢のとれた作である。

閣前には大理石の碑があつた。それは何んでも明の

弘治の創建
或は重修の
碑だつた様
に記憶して
居る。

此處を出

て二三寺廟
を覗いて見
たが、何れ
も荒廢して

居た。唯だ

西門の大通

あたりに門

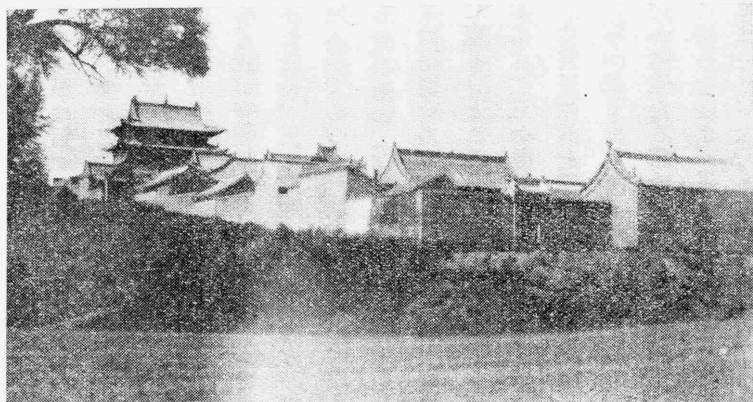
構のがつち

りしたカソ

リックの教

會堂があつ

た。そして其嚴めしい門扉には無用の者入る可らずと
白紙に日本語で張つてあつた。これを見ると聊か興醒
めざるを得なかつた。此他、城内東南隅に穴居生活の



第一圖 左雲楞嚴寺

處があり、一見せんと近いたが、突然犬が吠え出した
ので、斷念して引返した。

左雲から平魯まで行けやうとは全く考へて居ないこ
とであつたが、明日十時頃輜重隊のトラックが彼地に
行く爲此處を通過すると云ふので、一緒に行けやうと
森君が知らせて呉れた。

二十一日、縣城の北門を出て西に向ふ。寥家河を渡
ると道路は漸く登り勾配となり、やがて高原地帯を走
る。左手には遙遠として山脈が連なり、右手にはな
だらかな、山と云ふよりは寧ろ丘陵が起伏して居た。
見渡したところ、處々に赤褐色や赤紫色の地肌を現は
したところもないではないが、概してまばら乍らも雜
草に蔽はれ、其間には紫・黄・白などの名も知らぬ花
も咲いて居た。羊や馬などの放牧が一二目に留り、人
家でもある所らしく、楊柳の林も彼方此方にぼつ／＼
散らばつて見えた。

道路は廣く修造されたばかりで、兩側に溝を作つた
日本式なものであつた。石の全くない黄土の道であ
る。降雨量の少い此地方で溝を作ると云ふことは殆ん
ど必要がないばかりか、トラックなどが方向轉換する

場合却つて邪魔になることさえあると誰かが評したが曾て應縣からの歸途、運轉手が疲れて居たと見えて一度ならず側溝に落込みさうになり、三度目には全く落込んで、引出すのに随分時間を要したことなど思ひ出して、その批評に一應は贅せざるを得なかつた。遙か前方に輜重隊のトラックが立てる沙塵が見えて居たが威遠堡に達する迄は常に相當の距離が保たれ、追付かなかつた。威遠堡は城壁を以つて圍まれた小さな町であつた。此處にも我が守備隊が居た。軍のトラックは此處で暫時停車した後、更に二隊に分れ、前方の二十餘臺が平魯に向ふのであつた。城門を抜けて、路を西南にとる。即ち兎毛河の上流滄頭河に沿うて進む譯だ。威遠堡一帯は平地であるが、進むに従ひ兩側の丘陵も段々迫つて来る。ところどころには烽臺が立つて居た。更に右手には二三ヶ處ではあつたが南向の黄土の斷面を利用して穴居生活を營む部落も見えた。其頃になると行手の空が曇り出した。そして變化に乏しい黄土の風景は何か陰慘たる感情を呼ぶものがあり、名も知らぬ部落の傍らを過ぎ、黒い着物の百姓などが隠顯すると自分にはそれがなんとなく匪賊の様に思はれ

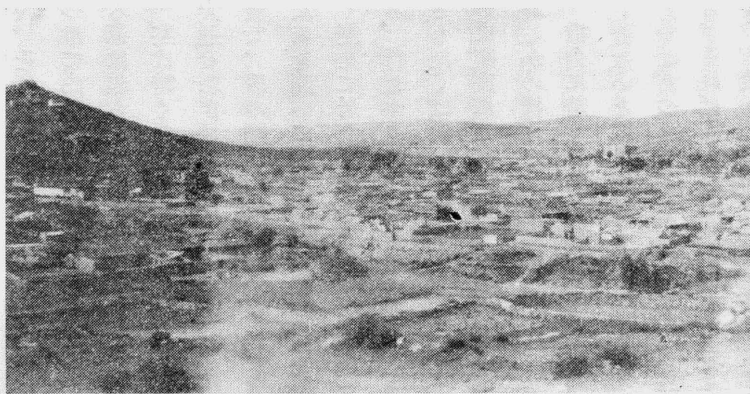
初めた。

突然前方のトラックが皆停止する。さては匪賊に遭遇したのかとびくとした。然し匪賊に遭遇したのではなくて、此邊には匪賊の出沒が多いから、其用意の爲に停止して、點呼をしたのであつた。丁度四日前のことであるが、此先の部落の西側で、平魯から大同へ連絡に向つた五臺のトラックの中、四臺が不運にも匪賊に襲撃され、二十數人の尊い生命が失はれたのだと云ふ。輜重隊のトラックは兵糧輸送の爲ではあつたが、歸途此等犠牲者の遺骨を持ち歸る可き使命をも有して居たのである。

遭難の地に至るとトラックは徐行して、英靈に弔意を表した。道の兩側には未だ黒焦げのトラックが引繰り返へされた儘になつて居た。其處は兩側が高く道路が丁度溝の様になつて居る。附近に隠れて待伏せて居た敵兵が此處の土手の上で手擲彈を浴びせたのだ。然し、翌朝の未明、平魯の警備隊の機敏なる出動に依つて、此讐は思ふ存分取ることが出来たさうである。此事は平魯に着いてから某中尉が物語つて呉れたことである。

遭難地の邊から兩側の山は全く迫つて來、河に沿うた惡路を進まねばならなかつた。輜重隊のトラックは先頭に裝甲車が立ち、最後の車には日章旗を立て、居た。空に飛鳥なく、地に樹木のない文字通りの荒寥たる所を行くにつけ、此日章旗が我々に對して如何に心強さを與へて呉れたことだらうか。急に道路が曲つて前方の車が悉く姿を没し、後方には唯だ沙塵のみが残されて居る場合も時々ある。そんな時には若し突然匪賊が自分達の車のみを襲ふ様なことがあつたならばととりとめのない雜念の浮ぶことも無いでは無かつた。

平魯の縣城はなだらかではあるが、何處を見ても荒蕪に蔽はれた山又山で圍まれて居る。城壁は南と北の高い丘を利用して築かれ、城門は東西南の三門を開く。我々の車は東門から入つた。先づ目に映ずるのは城内の荒廢した様子であつた。道に面した家は全く閉ざれて居るか、或は壞れて開け放たれて居た。トラックが大通りと思はれるところに止ると、住民等は物見高く集つて來たが、女らしい姿は殆んど見えない。氣のせいかも知れないが、彼等の面には物におびえた、うつろなものが漂つて居た。希望とか活氣とか云ふも



第二圖 平魯の北壁

此石造家屋は見る影もない様な荒らされ方で、内側の壁に至る迄で破壊されて居た。何故壁を破壊する必要があるのかと問ふと、壁に仕組んだ害を捜す爲だと云

のの全く感ぜられない顔であつた。設治局の吏員に案内されて、舊縣公署の跡に至る。燃え得るものは燃やし盡し、取り得べきは悉く奪はれて居るかの様であつた。アーチを應用した

ふ。

此處を出てから北側の丘に登る。遠くから見ると幾棟かの廟宇があつて立派に見える。然し近づけば何れも荒れ果て、塑神像の如きは大半破壊されて居た。暫く、惆悵として此魂を失つた町を俯瞰し、更に北方を見渡すと樹木のない丘陵が涯しなく起伏し、一段と高いところには一個の烽臺が我が議事堂に似た形をして立つて居た。すると下から森君が指導官の西窪氏と支那人とを伴つてやつて來た。

平魯の荒廢したのは直接交戦に依つたものではない。一度我軍が入城してから立退いたので、更に共產軍が入り、彼等が去るに當つて斯の如き荒し方をしたのださうである。そして住民も一時は殆んど避難したのだが、此頃漸く三分の一ばかりが復歸した。然し未だ婦女子の大部分は他處に残されて居るのだとのことであつた。

四人は連立つて丘を下り、縣内一の富豪の家と云ふのを見に行つた。其家からは三人の縣長を出して居るのださうで、堂々たる一郭をなした邸宅であつた。此處もひどく荒らされて家具調度とては何も残らず、奥

まるに従つて程度はひどかつた。例に依つて内側の壁が到る處壞されて居た。同行の支那人は共產軍が三日掛りでやうやく搜し得たと云ふ金窖の所在を指し示した。それは厨の壁面に作り込んだものである。燈火をつけて内部を照して呉れたが、別に覗いて見ようとすると氣は起らなかつた。

空は暗くなつて今にも雷雨が來さうなので、東西の大通を急ぎ足で歩いた。兩側の家は大部分が閉された儘で、戸の開いた家は數へるぐらゐしか無く、而も未だ店を開いて居る譯ではなかつた。そして人通りも全く絶えて居た。向ふから唯だ一人老婦が蹣跚として來る。行きすりに注意すると、氣でも狂つて居るのか、さもなくば白痴の様であつた。此女が何故か、今も奇妙に眼底にこびり付いて居る。當時の平魯の表徴でもあるかの様に。

宿舎に着くと間もなく驟雨が來た。家の中でも上着を著ないと寒さを感じた。部屋を見廻はすと壁に繪葉書ではあつたが、一枚ばかり美人の寫眞が張つてある。それは明治の末年頃の東都のさる傾城の面影らしく、束髪ではあるが、結び方など今のものとは相違し

て居た。此家の持主が曾つて日本に留學したとのことであるから、其際の土産であらう。更に此處で矢野先生の「現代支那研究」を見たことも亦うれいことの一。勿論これは西澤氏自身の藏書ではあつたが。

翌朝は可成早く平魯を出發せねばならなかつた。再び車上の人となつた頃は未だ空も曇つて居たが、漸くにして晴渡り、昨日の驟雨であたりの緑草はすっかり沙塵を去り、全く甦つた様に新鮮な緑色が初夏の陽光を享樂して居た。自分も亦何時の間にか、來る時の陰慘な氣持から解放され、若やいだ氣分に知らず知らずなつて居た。そして、若し平魯行が今日のことであつたなら、其印象も若干相違して居たであらうなどとも考へたりした。

威遠堡に着いたのは十時前後であらう。此處からは兎毛河の西側を右玉に行く路があるのであるが、トラック一臺だけでは危険だと云ふので、更に左雲の方向へ引戻り、途中余官屯と呼ぶ部落の邊で軍のトラックと別れ、自治政府のトラックだけが右玉へ向ふことゝなつた。

ゆるい斜面を持つた高原地帯を此處も亦、改修され

て間もないに思はれる道路が延々と續いて居る。

兎毛河の流に依つて形成された平地には河邊や部落附近に植ゑられた樹木が或は長く列をなし、或は林をなして見えて居た。平地を越えて遙かに、淡く紫紺にけぶつた山脈が續いて居る。これが長城地帯の内外を分かつ自然の境界である。あの山脈を越えれば涼城や和林格爾から歸化城、更に包頭に迄至る大平原が展開して居るであらう。長城は何處の邊に築かれて居るのかしらと考へた。然し、固より車から見える筈もなかつた。

道路の側には耕作されて居る所もあれば、耕作の痕跡のみを止めて雜草に蔽はれた所もあつた。寒瘦な土質であつて、恐らく連續的耕作を容れないのであらう。作物も草も皆瘦せて短かつた。一易田とか二易田と云ふは斯の如きを意味するのかと思ふ。處々には又地隙が出来て居た。なだらかな傾斜面に雨水の浸蝕作用に依つて深さ丈餘或は其以上もある割目が急に出来て居るのだ。其斷面は一樣に黃土の層で、沃土の層を全く含んで居ないのである。

然し、自分がかうした現實的な觀察から動もすれば

離れ勝で、唯だぼんやりと廣大な自然の示すすばらしい美しさに見とれることが多かつた。そしてそれがうれしくもあつた。彼方の山々の上に僅かばかり漂つて居る初夏

の白雲を眺めて、ふとカール・ブッセの 'Über den Bergen' と云ふ詩の一節を思ひ出した。

右玉に着いたのは午後間もなかつた。日歸りの旅では時間の餘裕



第三圖 右玉の鐘樓

は殆んどなく、晝食を濟ます程度しか残されて居なかつた。雲岡への車中既に顔見知りの縣長代理に挨拶し、暫くしてから珍しい回々料理の御馳走に舌鼓みを打つ。すき腹にはバイカルが馬鹿に浸みた。

出發開際に縣公署の東隣の文廟に參詣する。僻地のものとしては仲々堂々たる規模を有して居た。又西隣の寶寧寺をも一瞥した。境内の一郭は學校に使用され其他少しく荒れては居たが、曾つての隆盛を物語るには充分であつた。

二時過愈々歸途に就いた。南門の傍で車を停めて城壁に登る。正南の方、東と西から延びた山脈が漸く低くなつて、僅かの切目を示して居る邊が殺虎口だと云ふ。これが塞の内外、即ち綏遠から山西更に河北に迄至る交通路を扼する有名な關門である。遙かに殺虎口を望み、しばしではあるが、そこはかとなき感慨にふけらざるを得なかつた。

歸りの車はひた走りに走つた。然し途中再び左雲に寄つて暫く憩み、雲岡に到着した時も亦車を停めた。其處では永い夏の陽も最早谷から姿を消し、夕暮近い靜寂の中で千古の佛達が我々を迎へて呉れて居た。ほ

つとして車から降り、改つて彼方露大佛に對すると雄偉な御相の内に、何時もよりふくよかで親慈とでも謂ふ可き姿が拜されたのである。

三日二泊の短い旅ではあつたが、自分にとつては仲々思ひ出も深く得る所も尠くないものであつた。偶然にも左雲縣公署の厚意に依つて借覽することを得た同縣志の稿本なども亦其一だ。

此書は未だ學界に紹介されても居らず、且又該縣志の印行がないので、一面からは天下の稀觀本として珍重すべき意義を有するものである。先づ其體裁に就いて見るに縦三十四纏、横十九纏、四冊から成つて居る。第一冊には表に「左雲縣志稿初集」と題し、以下各々貳・參・肆集と記して居る。初集には序・凡例・目錄・圖考等の弁首の外、天文志・地理志の二卷を掲げ記載面百六十二頁である。貳集は建置志・官政志・人物志・選舉志の四卷、百三十頁あり、更に參集は賦役志・郵政志・武備志の三卷百七十二頁、肆集は専ら藝文志に費し、百八十二頁である。偕て序文、其他に依れば、本書の初稿は雍正七年李翼聖等の編纂に係り、

次いで嘉慶八年侯凱が增修、更にこれに基いて蘭炳章等が增修したものである。

雲崗に滞在して居た時、東方群第一窟の更に東側に左雲交界と岩壁に刻して居るのを見た。そしてこれに依つて雲崗鎮が清朝時代は恐らく左雲縣に屬して居たであらうと考へ、左雲方面から何か新史料が出ないものかと潜かに思つて居た。其後、白志謙氏の『大同雲崗石窟寺記』を再度披見し、雲崗が大同の管轄になつたのは實に民國三年以後のことで、それ以前は左雲縣に屬して居たことも遲蒔乍ら明かとなつたのである。されば左雲縣志稿に雲崗に關する記載のあるのも當然であり、而も同縣志に對する自分の興味も大半は此關係に就いてであつた。

先づ、卷二地理志古蹟の條を見ると、

石佛寺。在雲岡。又名佛窟山。傳自後魏拓拔氏時。始於神瑞。終於正光。凡七帝。歷百十餘年。規制甚宏。原寺十所。一曰同升。二曰靈光。三曰鎮國。四曰護國。五曰崇福。六曰童子。七曰能仁。八曰華嚴。九曰天宮。十曰兜率。其中有元載所造石佛二十龕。石窟千孔。佛像萬尊。由隋唐。歷宋元。

樓閣層凌。樹木鬱鬱。儼然爲一方勝槩。今非其舊。祇今弔古者登臨興慨耳。迤東數武。有三石竇噴泉。清冽可飲。行道多藉焉。題曰三石竇寒泉。卽八景之寒泉靈境。康熙三十五年冬。聖駕幸寺。御書匾額莊法相四字。

とある。

蓋し、雲岡石窟の建造に就いては從來、大體三種の説が行はれて居る。乃ち文成帝の興安二年説と和平元年説と更に明元帝の神瑞年間説とである。前二説の據るところは魏書釋考志の記載で、其解釋の相違が二説となつて現れたのであるが、神瑞年間建造説は朔平府志卷三方輿志古蹟の條等に見えるところに基いたもので、それは傳自後魏拓拔氏時。始於神瑞。終於正光。凡七帝。歷百十餘年。とある記事に外ならぬ。

今、朔平府志と左雲縣志稿の記載を比較するに文末に於ける若干の相違を除くの外殆んど同一の文である。尤も北京東方文化總委員會所藏本は卷四建置志、寺觀の條のみが生憎缺け見るを得ないので、卷三方輿志古蹟の條に掲げて居るところに就いてのみ云ふのであるが、前者には今非其舊。祇今弔古者登臨興慨耳

の十四字なく、其代り康熙三十五年冬に續けて、聖祖皇帝西征回鑾幸寺云々となつて居る。——大同雲岡石窟寺記所引の朔平府志の記事には儼然爲一方勝槩。と迤東數武との間に、其山最高處曰雲岡。岡上建飛閣三重。閣前有世祖章皇帝御書西來第一山五字の三十二字がある。白氏は卷數を記して居ないが若し其引用を誤つて居ないとすると、恐らく委員會本に缺けて居る寺觀の條にあるのであらう。

この記載と又略々同様なものが雍正山西通志卷一百七十寺觀の條にも見える。即ち

石窟十寺。在左雲縣東九十里。武周山雲岡堡。

後魏建。始神瑞。終正光。歷三百年而工始竣。其寺。一同升。二靈光。三鍾國。四護國。五崇福。六童子。七能仁。八華嚴。九天宮。十兜率。孝文帝亟遊幸焉。內有三元時石佛二十龕。壁立千仞。面面如來。其它石窰千孔。佛像萬尊。國朝順治八年。總督佟養量重修。康熙三十五年十二月十一日。聖祖皇帝。西征。幸寺。中御書莊嚴法象匾額。

とあるのがそれで、文中、莊嚴法象とあるのは莊嚴法相の誤りであることは、現存の獻額によつて明かであ

る。志稿の文と比較するにこれ又多少の相違こそあれ大略は同じである。但だ、前者に見える其中有「元載所造石佛二十龕」は後者では内有「元時石佛二十龕」となつて居る。後者に依れば元の時代に造つた佛龕と云ふ様にも解せられるが、現存の石窟中元代建造らしきものは絶無であるから、恐らく編者が意を以て變改したものと考へられる。——白氏は康熙山西通志作「元載所修石佛十二龕」未知究竟係新造乎？抑係修理乎？且二十與十二孰當と云つて居る。自分は未だ康熙山西通志なるものを見ない故此處には同氏の文を其儘掲げて置く——其處で元載と云ふ句の解釋が問題となるが志稿及府志の文を現存石佛と併せ考へると、恐らく白氏も言つて居る通り、元載は元魏の誤字或は誤用と解釋される。

要するに石佛寺に關係した通志、府志所掲の記載と同一系統のものが縣志稿にも記載されて居るのである。而も勿論それは別に異色を有するものではない。即ち大略通志、府志に従つて採録したまでのものであらう。されば結局量的たるに過ぎない譯ではあるが、然し今の所微々たる神瑞建造説の一例がこれにより更

に増加したぐらゐなことは云ひ得るであらう。

次に、康熙帝の雲岡行幸に就いても記して居る。即ち帝は康熙三十五年、噶爾丹を親征し、凱旋の途上殺虎口から右玉左雲を経て雲岡に立寄り、大同に出たのである。當時の有様に就いて、卷二巡幸の條には左の様に記載して居る。

聖祖仁皇帝。康熙三十五年十一月二十日。西征厄魯特噶爾丹凱旋。十二月初十日。次左雲縣。駐蹕生員范澎宅。十一日幸雲岡石佛寺。御書莊嚴法相匾。次日東行。

此他猶、卷三建置志、城池の條には、

雲岡堡。東至大同。西至高山各三十里。南北俱接。火墩臺八座。新舊二堡。舊設崖下。嘉靖之戊午也。因北面受敵。議移岡上。萬曆之甲戌也。舊者仍留以便行旅。新者尙土築。女牆係磚包。共高三丈五尺。周圍一里五分。下有寒泉。皆佛窟。亦靈境也。石佛。考佛坐像體。高五丈一尺五寸。

と雲岡の村落に關する記載がある。偕て現在の村落は武州河の北側即ち石窟のある岩壁を背後にして存するのであるが、別に丁度石窟中央群の崖上に當る臺上に

も一城堡がある。此城堡は一邊約二丁餘、高さ約三丈ばかりの方形をなし、其南面には西側に入口を開いた甕城がある。更に城壁の東南、西南の兩隅からは翼壁

とでも名付く可き、八の字形の壘壁が殆んど崖の端まで延びて居る。此城堡の構造は一部分には塼を使用した痕跡を有するが、大部分は唯だ黄土の乾練瓦を積上げただけである。現在は内部に居住者が無いが、曾つての面影は畠地の側の壘々たる瓦塼からも窺はれ、且又瓦塼の示すところに依つて明頃のものであらうと推測された。然るに此記載に依り此城堡が萬曆甲戌即ち二年に築造されたものであることが確實に知り得られる譯である。又現在の部落にも南東西の三面に城壁が存して居る。尤も部落の半分ぐらゐは城壁からはみ出ては居るが。其東西壁には城門があり、これには萬曆十四所造になる迎薰・懷遠と刻した石の額が掲げられて居る。猶、俗稱彌勒殿〔第七窟〕内に嘉靖四十三年の重修雲岡堡碑がころがつて居る。此碑が果して臺上の城堡に關係したものであるか、崖下のそれに關係したものであるかに就いては、曾ては疑問を有したこともあつたが、此記載に依つて崖下の城堡に關係するもの

であることが氷解したのである。

縣志稿には又、同じく城池の條に高山鎮に就いても記載して居る。

高山城。城高四丈二尺。周圍四里三分。建於嘉靖乙未。〔塼〕包於萬曆丙子。

高山鎮も雲岡滯在中色々と思ひ出を有するところである。雲岡滯在中一頃、數千とも云へば數百とも云ひ數は實の所不明であるが、兎に角匪賊が雲岡と高山鎮との中間に迫つて來、電話線を切斷するは固よりのこと、道路に地雷などをうづめて置くことがあつて、雲岡警備の兵隊中にも相當無氣味な緊張が續いた時があつた。或夜など兩者の間で三十分毎に翌朝迄で信號をしようと云ふのである。電話の傍のソファアの上に寝て居た自分は其信號の呼鈴でどうしても寝入ることが出來ず、不安の中に滑稽を感じ、終りには申譯はないことであるが一そうのこと電話線が切れゝばよいなどと考へもしたりした。勿論其夜は遂に事もなかつたが翌夜は事故が起り、電話不通で御蔭で不安は不安として兎に角眠ることは出來ると云ふ始末。その御隣の高山鎮が此記載に依つて、嘉靖乙未、即ち十四年に築造

されたものであることが知られるのである。果して然らば彼の舊高山の廢趾は少くとも嘉靖十四年以前の鎮城として榮えて居たのであらうと考へられよう。

蓋し、明の正統と嘉靖とに於て蒙古族の蠢動が盛んとなり、北邊の事變が繁くなつて來た。正統十四年の土木の變は餘りにも有名であり、嘉靖年間に於ける俺答汗の入寇も亦世人の知るところである。蓋し、明初徐達の北方經營の結果として洪武二十五年には現在の右玉縣城には定邊衛が、左雲縣には鎮朔衛が設けられて各々屯田防邊に當つた。然し間もなく廢止され、其後やうやく永樂帝の積極策に依つて、其七年には此處に大同左衛〔左雲〕同右衛〔右玉〕が再び設けられることゝなつた。然るに正統十四年に至ると外長城外の諸衛は遂に廢止せざるを得ざることゝなり、明は長城外の玉林衛と右衛とを合併して右玉林衛と稱し、雲川衛と左衛と合併して左雲川衛と呼んで僅かに表面上を糊塗

して居る始末であつたが、其後嘉靖年間に至ると蒙古人は更に長城を越えて屢々入寇する有様である。舊高山鎮から今の高山鎮へ移動したのも恐らく此入寇と關係を付けることが出来はしないであらうか。縣志稿はそれ以上記すところがないから、其決定は大方の示教に俟たねばならないのは固よりであるが、唯だ思付いた迄に記して置く。

附記

右玉左雲の名稱が定つたのは清の雍正三年に衛を廢して縣とした時からである。平魯も明の成化十七年に平魯衛が置かれ、縣となつたのは矢張り雍正三年であつた。京包線が開通するまでは綏遠地方と山西河北を結ぶ一大交通幹線上に位する此等の縣城も可成り繁榮したであらう。僅かの日程の旅の瞥見にしか過ぎないが、目に映ずるところも過去のそれを物語つて居た。